

二〇二五年度 同朋大学 一般選抜1期（A方式） 国語 問題用紙

【注意事項】

- 一、試験開始の合図があるまで、問題用紙は開かないこと。
- 二、設問 ☐ 現代文は共通問題である。全員解答すること。
- 三、設問 ☐ 現代文と設問 ☐ 古文は選択問題である。いずれか一方を選択し解答すること。
- 四、解答は、解答用紙に記入すること。
(設問 ☐・☐ 用、または、設問 ☐・☐ 用のいずれかを使用する。)
- 五、「始め」の合図とともに、解答用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入すること。

〈共通問題〉

〔一〕次の文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で本文を改編したところがある）。

縁日の幕は子どもによって引き開けられる。未だ人々は常の日の営みの中にあり、祭礼の時も訪れていないのに、子どもたちは、はやばやと参道すじや境内に出没する。そして、ポツリポツリと屋台を組み始めた露店商人や、祭礼の準備を整える宗教家たちに、待ちかねた視線を投げながら、ア束の間を徘徊して、消えていく。A彼らの蠢動は、訪れる賑わいのための、ささやかな触れ太鼓でもあろうか。その(a)ウナカしに応えて、露店商人たちの動きもようやく活発になる。こうして、子どもたちが「まだか、まだか」と動き回るとき、寺社の(b)界限は祝祭空間として徴づけられ、「Bハレの日」のたたずまいに色めき立つ。

縁日とは、神仏がこの世に縁をもつ、「結縁の日」の意である。寺社の門前には非定住の商人が寄り集まり、常にはない場所に常にはない屋台を張って、一時的な商いの場を出現させる。祭が果てれば、その日の賑わいは跡もとどめず、人々はちりぢりに去っていく。これら、日常的な営みとは全く「無縁の」、いきずりの人々の集まりを、何故か「縁日」と呼びなすこのパラドックス。これこそ、「縁」というもののありようを根源的に問い直す一つの視角ではないか。しかも、縁日を導き、それと不可分に結びつくのが子どもであるとすれば、子どもこそこれらの「縁」の(c)バイカイ者である。彼らはその境界者の性格をイ遺憾なく発揮して、日常と非日常、神事と商い、そして定住と(d)ヒョウハクを有縁のものとするべく、祭礼の日の寺社の界限を、精力的に動き回っているかに見える。

縁日空間は「子ども」を有徴化させる。祝祭の幕を引き開け、ウ櫛比する屋台に群がり、じぐざぐと迷路状に動き回って空気を攪拌する彼ら。わた菓子やあんず飴は、子どもらに持ち運ばれることで、その甘やかな色彩を四囲にまき

ちらし、ヨーヨーの赤や緑は、彼らの指先で跳びはねて、陽気な祝祭性をあらわにする。どちらを向いても、目につくのは、子ども、子ども、子ども……。縁日人口はその八割近くが、子どもによつて占められているように見える。

I、私どもが試みた計測、ある地点の横断者をサンプルとするそれでは、往来する人々の中に子どもの占める割合は平均五四パーセント、最少時は三九パーセントにすぎなかった。とすれば、縁日空間が子どもで充満しているように見えるのは、「縁日」という常ならぬ時空を「地」とするとき、^{ひしめ}犇き合う「子ども」という「図柄」が常になり際やかさで浮かび上り、私どものまなざしに敏く^{すく}掬い取られる、ということであろう。そして、私どもはそこに一つの「徴」を読む。すなわち、彼らこそこの祝祭性のにない手である、と。

こうして、子どもたちは、そのカオティックな動き^{注1}によつて縁日人口に占める実際的な比率を超え、最も「縁日的、祝祭的」存在となる。このとき、彼らは、祝祭イメージを触発する「記号」として、優れて効果的に機能するのだ。彼らが飴をしゃぶり、ヨーヨーを躍らせながら、人混みを右往左往するとき、私どもは、日常的秩序が無化され、縁日的時間が巡り始めたことに気づく。彼らが、釣れそうにもない「鰻^{うなぎ}釣り」に大枚をはたいて、ぬらぬらと不気味なあの標的と格闘するとき、あるいは、薄汚れた見世物のテントの前であやしげなエ^エ口^口上に呆けた表情を見せるとき、私どもは、縁日のいかがわしさとそのゆえの黒々とした笑いに身体がうずくのを感じる。

ところで、縁日の場で、子どもは、単にイメージ的次元でのみその祝祭性になうのではない。彼らは、実質的にも縁日的賑わいの重要な構成員なのだ。露店商たちの最大の顧客は子どもなのだし、彼らの浪費によつてのみ、その商いは成り立つのだから。

ガラス玉の指輪は、本物そっくりの輝きと本物では決してあり得ない値段によつて、女の子の所有物となる。鰻釣りや射的の顧客の大半は、一日大尽の少年である。わた菓子や鼈^{べっ}甲飴は、あの特有の色と形で子どもらの美意識に交響し、屋台のたこ焼きは、ソースの(e)コ^コげる独特の匂いで子どもらを吸引する。

これら、縁日的品々は、大別すると次の二つの特性で把えられる。すなわち、食物でいえば、たこ焼き、お好み焼き、

あるいはわた菓子に代表される「どろどろ、ぐにやぐにや、ふわふわと不定形なもの」、そして、C あんず飴や鼈甲飴のような「透明でもろくはかなく美しいもの」。この類型化は玩具や遊びものにも適用し得るだろう。例えば射幸的遊具や遊戯に見られる不確定さ、それはどろどろと欲望を誘い、ふわふわとした頼りなさで遊び手を(f)ホン^フロウする。そして、ガラス玉指輪や小物玩具は目も彩^{あや}に美しく、もろくはかない。

「どろどろ」と隱喩的に結合される不定型さと頼りなさ、それに「縁日的綺羅」の物語る模擬性と(g)紛^フい物性、これらは、まさに「明瞭、堅固、真物、永続性」などのような、生活世界における価値に対立する。そのゆえにこそ、時としてD 大人たちの忌避の感覚を刺激し、そこにこそ、子どもを惹きつけてやまない「縁日的魅力」が籠められているのであろう。

皆川美恵子は、縁日の生態を報告した一文の中で、この「あやしげで、うさんくさい」縁日的品々をさまざまに拾い出している(皆川美恵子「清正公縁日の生態」(同人誌『舞々』四号、一九八一年)。例えば、「宝引き」の遊びで苦心の末に引き当てた美しいカレンダーは、昨年のものであった。ライフルの射撃は、音だけが派手で弾圧が弱く、容易に標的を射ち落とせない。ままごと道具の店に並ぶコカ・コーラのミニ^{注2}アチュールは、「コク・コーラ」と記され、雪印牛乳は「雷印牛乳」である。店先に卵の殻を山と積んで宣伝しながら、卵などほとんど入っていないベビーカステラ、未熟なバナナをチョコレートで(h)覆^フったチョコバナナ、……。

これら屋台に並ぶ品々は、見事なまでの「いかさま性」に彩られて、日常世界を遊戯のレベルにスライドさせ、日常的諸価値を(i)擲^フ擲^フしている。「雪印」を「雷印」へと移行させるあたりには、さながら江戸戯作者の感性すら仄^ほ見えるほどだ。これらいかがわしい品々をめぐって、遊戯的レベルに花開く脚本なしのドラマ、それが縁日世界であろう。そして子どもとは、その遊戯的虚構に最もよく共鳴し、そこに出現したあやかしの世界と直接的に交流し得る身体を持ち主なのだ。

しかも、彼らの「お小遣い」は、今日は大人の管理下から逃れ、その金銭感覚も日常的秩序から解放されて浪費する

自由を謳歌^{おう}している。縁日の(j)ザットウを徘徊する子どもらの顔が常になく大人びて、時には「うさん臭く」さえ見えるのは、この自律性のゆえであろうか。E 日常的諸価値のすべて相対化された縁日世界で、子どもらの位置もまた相対化される。彼らは、生活世界における構造的劣者の位置から解放されて、堂々と一人前に振舞うことが可能なのだ。

注1 カオティック：混沌とした。無秩序の。

注2 ミニアチュール：緻密に描かれた小さな絵や模型。

(本多和子『異文化としての子ども』による)

問一 波線部(a)「ウナガ」、(c)「バイカイ」(d)「ヒョウハク」、(e)「コ」、(f)「ホンロウ」、(j)「ザットウ」を、それぞれ漢字に直せ。

問二 波線部(b)「界限」、(g)「紛」、(h)「覆」、(i)「揶揄」の読みを、それぞれひらがなで答えよ。

問三 二重傍線部ア「束の間」、イ「遺憾なく」、ウ「櫛比する」、エ「口上」の本文中における意味として最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

ア 束の間

- 1 狭い通路
- 2 祭礼の広間
- 3 昼下がり
- 4 短い時間
- 5 稲刈りの時期

イ 遺憾なく

- 1 潔く
- 2 十分に
- 3 素早く
- 4 遠慮がちに
- 5 楽しく

ウ 櫛比する

- 1 きらきらする
- 2 目立っている
- 3 隙間なく並ぶ
- 4 まばらである
- 5 混ざっている

エ 口上

- 1 道化師
- 2 笑顔
- 3 風貌
- 4 言い訳
- 5 せりふ

問四 傍線部A「彼らの蠢動」とあるが、これはどのようなことを指すか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 露店商人や宗教家たちが祭礼などの準備を始めること。
- 2 露店商人があちこちで屋台を勢いよく組み立てること。
- 3 子どもたちが参道すじや境内に出没し徘徊すること。
- 4 子どもたちを含む大勢の人々が徐々に集まってくること。
- 5 祭礼の開始で神々が大地を揺らしているように感じること。

問五 傍線部B「ハレの日」とあるが、

(一)「ハレ」の対義語をカタカナ一字で答えよ。

(二) (一)で答えた語の意味として最も適当なものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | |
|-------|--------|------|-------|---------|
| 1 ふだん | 2 体調不良 | 3 特別 | 4 曇り空 | 5 縁起が悪い |
|-------|--------|------|-------|---------|

問六 空欄 I にあてはまる語として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|--------|
| 1 さらに | 2 例えば | 3 そこで | 4 しかし | 5 なぜなら |
|-------|-------|-------|-------|--------|

問七 傍線部C「あんず飴や鼈甲飴のような『透明でもろくはかなく美しいもの』」とあるが、本文中にこれを端的に五字で表現した箇所がある。その五字を抜き出して答えよ。

問八 傍線部D「大人たちの忌避の感覚を刺激し」とあるが、これはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 大人たちが縁日的品々に対して嫌悪感を持つこと。
- 2 大人たちが生活世界における価値から逃げ出したくなること。
- 3 大人たちが縁日的品々を類型化したくないと思うこと。
- 4 大人たちが縁日的品々のうさん臭さに疑問を持つこと。
- 5 大人たちが縁日的品々に魅力を感じてしまうということ。

問九 傍線部E「日常的諸価値のすべて相対化された縁日世界」とあるが、

- (一) これはどのようなことか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。
- 1 縁日においては日常的諸価値が絶対であるということ。
 - 2 縁日においては日常的諸価値が新たに設定されるということ。
 - 3 縁日においては日常的諸価値が比較対象になるということ。
 - 4 縁日においては日常的諸価値が意味をなさないということ。
 - 5 縁日においては日常的諸価値が平等になるということ。

(二) 「日常的諸価値」とはどのようなものか。これを具体的に説明した箇所を、本文中から三十字以上三十五字以内で抜き出して答えよ。

問十 本文の内容と合致しているものを次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 「縁日」は「無縁の」人たちが集まるから「縁日」と呼ぶのであり、神仏との「結縁」の意ではない。
- 2 縁日の「縁」は、「境界者の性格」を持つている子どもたちの存在によってのみ結ばれるものである。
- 3 縁日でガラス玉の指輪のような紛い物が売れるのは、日常的秩序が解体される「ハレの日」だからである。
- 4 子どもたちが祝祭の中心にない手になるのは、「生活世界における構造的劣者」だからである。
- 5 「生活世界における構造的劣者」には老人も含まれることから、老人も祝祭の中心にない手と言える。

〈選択問題〉

〔二〕次の文章は太宰治の小説『黄金風景』の全文である。これを読んで、後の問いに答えよ。

私は子供のときには、余り質のいい方ではなかった。女中をいじめた。私は、のろくさいことは嫌いで、それゆえ、のろくさい女中を殊にもいじめた。お慶は、のろくさい女中である。林檎の皮をむかせても、むきながら何を考えているのか、二度も三度も手を休めて、おい、とその度毎にきびしく声を掛けてやらないと、片手に林檎、片手にナイフを持ったまま、いつまでも、ぼんやりしているのだ。足りないのではないか、と思われた。台所で、何もせずに、ただのっさりつつ立っている姿を、私はよく見かけたものであるが、子供心にも、うすみつともなく、妙に瘡にさわって、おい、お慶、日は短いのだぞ、などと大人びた、いま思ってもアの寒くなるような非道の言葉を投げつけて、それで足りずに一度はお慶をよびつけ、私の絵本の観兵式注1の何百人となくうようよしている兵隊、馬に乗っている者もあり、旗持っている者もあり、銃担っている者もあり、そのひとりひとりの兵隊の形を鉢はさみでもって切り抜かせ、不器用なお慶は、朝から昼飯も食わず日暮頃までかかって、やっと三十人くらい、それも大将の鬚ひげを片方切り落したり、銃持つ兵隊の手を、熊の手みたいに恐ろしく大きく切り抜いたり、そうしていちいち私に怒鳴られ、夏のころであつた、お慶は汗かきなので、切り抜かれた兵隊たちはみんな、お慶の手の汗で、びしょびしょ濡れて、私は遂に(a)癩癩をおこし、お慶を蹴った。たしかに肩を蹴ったはずなのに、お慶は右の頬をおさえ、がばと泣き伏し、泣き泣きいった。「親にさえ顔を踏まれたことはない。一生おぼえております。」うめくような口調で、とぎれ、とぎれそうだったので、A私は、さすがにいやな気がした。そのほかにも、私はほとんどそれが天命でもあるかのように、お慶をいびった。いまでも、多少はそうであるが、私には無知なイの者は、とても(b)カンニンできぬのだ。

一昨年、私は家を追われ、一夜のうちに窮迫し、巷^{ちまた}をさまよい、諸所に泣きつき、その日その日のいのち繋ぎ、やや文筆でもって、自活できるあてがつきはじめたと思ったとたん、病を得た。ひとびとの情で一夏、千葉県船橋町、泥の海のすぐ近くに小さい家を借り、自炊の保養をすることができ、毎夜毎夜、寝巻をしぼる程の寝汗とたたかい、それでも仕事はしなければならず、毎朝毎朝のつめたい一合^{注2}の牛乳だけが、ただそれだけが、奇妙に生きているよろこびとして感じられ、庭の隅の夾竹桃^{きょうちくとう}の花が咲いたのを、めらめら火が燃えているようにしか感じられなかったほど、私の頭もほとほと痛み疲れていた。

そのころのこと、戸籍調べの四十に近い、痩せて小柄のお巡りが玄関で、帳簿の私の名前と、それから無精髯^{ひげ}のばし放題の私の顔とを、つくづく見比べ、おや、あなたは……のお坊ちゃんじゃございませんか？　そう言うお巡りのことばには、強い故郷の訛^{なまり}があつたので、

「そうです。」私はふてぶてしく答えた。「あなたは？」

お巡りは痩せた顔にくるしいばかりにいつぱいの笑みをたたえて、

「やあ。やはりそうでしたか。お忘れかも知れないけれど、かれこれ二十年ちかくまえ、私はKで馬車やをしていました。」

Kとは、私の生まれた村の名前である。

「ごらんの通り、」私は、にこりともせずに応じた。「私も、いまは落ちぶれました。」

「とんでもない。」お巡りは、なおも楽しげに笑いながら、「小説をお書きなさるんだったら、それはなかなか出世です。」

私は苦笑した。

「ところで、」とお巡りは少し声をひくめ、「お慶がいつもあなたのお噂をしています。」

「おけい？」すぐにはのみこめなかった。

「お慶ですよ。お忘れでしょう。お宅の女中をしていた——」

思い出した。ああ、と思わずうめいて、私は玄關の式台にしゃがんだまま、頭をたれて、その二十年まえ、のろくさかったひとりの女中に対しての私の悪行が、ひとつひとつ、はつきり思い出され、ほとんど座に耐えかねた。

「幸福ですか？」ふと顔をあげてそんなウ^{注3}ない質問を発する私のかおは、たしかに罪人、被告、(c)ヒクツな笑いをさえ浮かべていたと記憶する。

「ええ、もう、どうやら。」くつたなく、そう朗らかに答えて、お巡りはハンケチで額の汗をぬぐって、「かまいませんでしょうか。こんどあれを連れて、いちどゆっくりお札にあがりましょう。」

B 私は飛び上がるほど、ぎよつとした。いいえ、もう、それには、とはげしく拒否して、私は言い知れぬ屈辱感に身悶えしていた。

けれども、お巡りは、朗らかだった。

「子供がねえ、あなた、ここの駅につとめるようになりましてな、それが長男です。それから男、女、女、その末のが八つでことし小学校にあがりました。もう一安心。お慶も苦勞いたしました。なんというか、まあ、お宅のような大家にあがって行儀見習いした者は、やはりどこか、ちがいましてな。」すこし顔を赤くして笑い、「おかげさまでした。お慶も、あなたのお噂、しじゅうして居ります。こんどの公休には、きつと一緒にお札にあがります。」急に真面目な顔になって、「それじゃ、きょうは失礼いたします。お大事に。」

それから、三日たって、私が仕事のことよりも、金銭のことだと思い悩み、うちにじつとして居れなくて、竹のステッキ持って、海へ出ようと、玄關の戸をがらあけたら、外に三人、浴衣着た父と母と、赤い洋服着た女の子と、絵のように美しく並んで立っていた。お慶の家族である。

私は自分でも意外なほどの、おそろしく大きな怒声を発した。

「来たのですか。きょう、私これから用事があって出かけなければなりません。お気の毒ですが、またの日においで下

さい。」

お慶は、品のいい中年の奥さんになっていた。八つの子は、女中のころのお慶によく似た顔をしていて、うすのろらしい濁った目でぼんやり私を見上げていた。私はかなしく、お慶がまだひとことも言い出さぬうち、逃げるように、海浜へ飛び出した。竹のステッキで、海浜の雑草をなぎ払いなぎ払い、いちどもあとを振りかえず、一步、一步、エ踏むような^{注4}(d)荒んだ歩きかたで、とにかく海岸伝いに町の方へ、まっすぐに歩いた。私は町で何をしていたろう。ただ意味もなく、活動小屋の絵看板見あげたり、呉服屋の飾り窓を見つめたり、ちえっちえつと舌打ちしては、心のどこかの隅で、C負けた、負けた、と(e)囁く声が聞こえて、これはならぬと激しくからだをゆすぶっては、また歩き、三十分ほどそうしていたろうか、私はふたたび私の家へとつて返した。

うみぎしに出て、私は立ち止まった。見よ、前方に平和の図がある。お慶親子三人、のどかに海に石の投げっこしては笑い興じている。声がここまで聞こえて来る。

「なかなか、」お巡りは、うんと力こめて石をほうって、「頭のよさそうな方じゃないか。あのひとは、いまに偉くなるぞ。」

「そうですとも、そうですとも。」お慶のオ高い声である。「あのかたは、お小さいときからひとり変わって居られた。目下のものにもそれは親切に、目をかけて下すった。」

私は立ったまま泣いていた。けわしい興奮が、涙で、まるで気持ちよく溶け去ってしまふのだ。

D負けた。これは、いいことだ。そうなければ、いけないのだ。かれらの勝利は、また私のあすの出発にも、光を与える。

注1 観兵式：整列した軍隊を天皇が閲覧する儀式。

注2 一合：「合」は容量の単位。一合は約〇・一八リットル。

注3 式台：玄関先に設けた一段低い板敷きの部分。

注4 活動小屋：映画館の旧称。

問一 波線部(a)「癰癰」、(d)「荒」、(e)「囁」の読みを、それぞれひらがなで答えよ。

問二 波線部(b)「カンニン」、(c)「ヒクツ」を、それぞれ漢字に直せ。

問三 空欄ア　　ア　　ウ　　オ　　にあってはまる語として最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

ア： 1 脳天 2 眉間 3 背筋 4 片腹 5 膝頭

イ： 1 強欲 2 魯鈍 3 貧弱 4 純朴 5 実直

ウ： 1 性懲り 2 気配り 3 屈託 4 突拍子 5 愛想

エ： 1 二の足 2 虎の尾 3 地団駄 4 お百度 5 無駄足

オ： 1 嘲笑うような 2 誇らしげな 3 涙まじりの 4 いきり立った

5 勝ちほこった

問四 傍線部A「私は、さすがにいやな気がした」とあるが、それはなぜか。理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 女中の身分でありながら、お慶が自分に対して直接恨みがましいことを申し立てたから。
- 2 自分はたしかに肩を蹴ったのに、お慶はわざと顔を蹴られたかのように振る舞ったから。
- 3 自分の大切にしていた絵本の兵隊を、不器用なお慶がすべて台無しにしてしまったから。
- 4 お慶の何をするにもろくさいところが、その当時の自分には許せないことだったから。
- 5 自分がお慶に対して、忘れられないほどの嫌な思いをさせてしまったのだと感じたから。

問五 傍線部B「私は飛び上がるほど、ぎょっとした」とあるが、それはなぜか。理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 お慶に対して自分が働いた悪行のすべてを知っているにもかかわらず、あてつけがましく妻を連れてお礼に上がると言うお巡りの態度に、悪意を感じたから。
- 2 故郷で妻のお慶をいじめていた自分を恨んでいるはずのお巡りが、そんな気持ちを少しも表情に出さず、むしろ自分に感謝していることが予想外だったから。
- 3 子供の時の自分はひねくれた性質で、女中のお慶に対して悪さばかりしていたのに、それを一度も謝っていないことを思い出し、罪悪感にさいなまれたから。

- 4 自分が子供の頃に軽蔑し数々の悪行を働いた相手であるお慶に、現在の落ちぶれた姿を見られることは、自分にとって居たたまれないほどの屈辱だったから。
- 5 お慶が女中をしていた頃の自分はまだ子供で、お慶に悪さばかりしていたにもかかわらず、わざわざその時のお礼に来てもらうのは申し訳ないと思ったから。

問六

傍線部C「負けた、負けた」と傍線部D「負けた」について、五人の学生が会話している。次の1～5の中から、内容を正しく理解した発言を二つ選び、番号で答えよ。

- 1 (学生1) 「Cには、幸せな家庭を築いたお慶を目のあたりにした『私』の嫉妬が表れていると思う。幸せそうなお慶に対して、落ちぶれた今の自分を惨めに感じたんだらうね。」
- 2 (学生2) 「そうだね。さらに、その後の海岸の場面で、昔は見下していたお慶夫婦が、『いまに偉くなるぞ』なんてあてつけがましく話しているのだから、Dではいっそう自分の不幸を感じたんだと思う。」
- 3 (学生3) 「いや、それは違うよ。Cは、お慶に負けたという意味ではなくて、幸せそうなお慶に嫉妬してしまった自分自身に負けたという意味だと思う。自分自身の心の狭さに気がついたんだね。」
- 4 (学生4) 「CとDの『負けた』は、まったく意味が異なっているのは明らかだね。Dでは、自分への感謝の気持ちを持続してくれているお慶の人間性を、素直に受け入れているんだと思う。」
- 5 (学生5) 「そうかな。おそらく『私』は、海岸でのお慶たちを見て、あらためて自分を客観的に否定せざるを得なくなったんだ。Dは、その強い自己否定を表した言葉だよ。」

問七 次の1～6の中から、太宰治の作品を二つ選び、番号で答えよ。

1 細雪

2 舞姫

3 潮騒

4 草枕

5 斜陽

6 津軽

〈選択問題〉

【三】 次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅲ】は、いずれも同じ作品内のものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

【文章Ⅰ】

同じ心ならん人と(a)しめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなきことも、(b)うらなく言ひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違はざらんと向ひゐたらんは、ひとりある心地やせん。

たがひに言はんほどのことをば、「げに」と聞く(c)かひあるものから、いささか違ふ所もあらん人こそ、「A我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともうち語らはば、つれづれ慰まめと思へど、げには、少し(d)かこつ方も我と等しからざらん人は、B大方のよしなしこと言はんほどこそあらめ、まめやかな心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞ、(e)わびしきや。

【文章Ⅱ】

ひとり、灯の下に文をひろげて、見ぬ世の人を友とする、こよなう慰むわざなり。

【文章Ⅲ】

つれづれなるままに、日ぐらし、硯にむかひて、心にうつりゆく X を、そこはかとなく書きつくれば、あやうこそものぐるほしけれ。

問一 波線部(a)「しめやかに」、(b)「うらなく」、(c)「かひ」、(d)「かこつ」、(e)「わびしき」の本文中における意味と

して最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

(a) しめやかに

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|
| 1 | しとやかに | 2 | 悲しげに | 3 | しみじみと | 4 | こつそりと | 5 | おごそかに |
|---|-------|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|

(b) うらなく

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|--------|
| 1 | 嘘がなく | 2 | 偏りがあり | 3 | 恨みがなく | 4 | 平等であり | 5 | 隔て心がなく |
|---|------|---|-------|---|-------|---|-------|---|--------|

(c) かひ

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 機会 | 2 | 価値 | 3 | 相手 | 4 | 事柄 | 5 | 時間 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

(d) かこつ

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|---------|---|-------|---|--------|---|--------|
| 1 | 大切にする | 2 | 人のせいにする | 3 | 愚痴を言う | 4 | 誇らしく思う | 5 | ぼんやりする |
|---|-------|---|---------|---|-------|---|--------|---|--------|

(e) わびしき

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|--------|---|--------|---|------|---|-----|
| 1 | やるせない | 2 | 興ざめである | 3 | みすばらしい | 4 | 謝りたい | 5 | 苦しい |
|---|-------|---|--------|---|--------|---|------|---|-----|

問二 二重傍線部の係助詞「こそ」について、その結びの説明（単語・品詞）として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | | | | | |
|---|-------|---|-------|---|--------|---|--------|---|-------|
| 1 | 思ふ・動詞 | 2 | 憎み・動詞 | 3 | 慰まめ・動詞 | 4 | あらめ・動詞 | 5 | め・助動詞 |
|---|-------|---|-------|---|--------|---|--------|---|-------|

問三 傍線部A「我はさやは思ふ」の現代語訳として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | |
|---|------------|---|-------------|---|--------------|
| 1 | 私はそうは思わない | 2 | 私はそのように思う | 3 | 私はそう思ったのだろうか |
| 4 | おまえはそう思うのか | 5 | おまえはそうは思うまい | | |

問四 傍線部B「大方のよしなしごと言はんほどこそあらめ」はどのような意味か。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- | | |
|---|------------------------------|
| 1 | 世間一般の情けないことを言わない人達であればよいもの |
| 2 | ごく普通のたわいもないことを言うような身分ならよいが |
| 3 | 並一通りのとりとめもないことを言うような場合は構わないが |
| 4 | 世間一般のつまらないこととは言わないのでよいものの |
| 5 | 並一通りのたわいもないことは言うまでもないのだが |

問五 【文章Ⅰ】の内容に合致するものとして、最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 自分と少しも違わない心の人と向かい合うのは、一人でいるのと変わらずつまらない。
- 2 自分と同じ心の人と語り合いたいなら、相手の意に反しないように気遣うとよい。
- 3 自分に考え方が近い人と話し合うのは悪くはないが、本当の心の友と言うにはほど遠い。
- 4 考え方が少し違う人とは言い争ってしまいがちだが、それこそが心の友と言えるだろう。
- 5 考え方が似ている人とはばかり意見を交わしていたら、心の友が去ってしまうだろう。

問六 【文章Ⅱ】は、【文章Ⅰ】に続いて記されている。【文章Ⅰ】を踏まえると、どういう理由で慰められると考え

られるか。最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 夜更けに灯のもとで亡くなった友人の手紙を読むと、若かった頃が思い出されるので慰められる。
- 2 書物に描かれている架空の人物の性格は、自分で自由に解釈することができるので慰められる。
- 3 他人というより孤独を愛しているので、本のなかの人を友とするのは気持ちが落ち着き慰められる。
- 4 書物を広げると、その中には大勢の人物が描かれているので、友達が増えて孤独が慰められる。
- 5 書物のなかの友人なら、自分で理想的な人を選ぶことができて気を遣う必要もないので慰められる。

問七 【文章Ⅲ】は、この作品の冒頭部分である。

(一) この作品の著者として正しいものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|------|---|------|---|------|
| 1 | 紀貫之 | 2 | 鴨長明 | 3 | 兼好法師 | 4 | 在原業平 | 5 | 清少納言 |
|---|-----|---|-----|---|------|---|------|---|------|

(二) 空白

X

 に当てはまることばは【文章Ⅰ】の文中にも書かれている。【文章Ⅰ】からその六字を抜き出して答えよ。